



**戦国武將に学ぶ経営戦略(1)**

**織田信長**

**流通経済の支配こそが天下を制す**



戦国時代の武将で、現在で一番人気がある人物が織田信長である。織田信長の劇的な生涯が人気の秘密のようだが、古い発想や行動を否定して、新しいものを求め続けた姿が現代にも通じるものがあるからだ。

信長というと、生死も顧みずに果敢に今川義元を奇襲で倒した桶狭間の合戦や、鉄砲の三段構えで、騎馬軍団の武田勝頼を破った長篠の戦いが有名だ。

信長は戦いでは常に現場に立って部下を指揮しているが、これは経営者にとっては不可欠なものとなる。

信長は戦略にも優れていたが、それ以上に優れていたものがある。それは、能力主義によって人材を活用したことだ。信長以前は、家柄や地位によって活動の場が与えられていたが、それでは古い組織を守るといった守勢でしかない。飛躍するためには能力が優れている新しい人材を活用して、攻勢に転じなければならない。信長は豊臣秀吉をはじめとして、身分などは気にせずには有能な人物を積極的に登用した。

それによって組織が若返り、生き生きとした活力に満ちあふれたことが、織田軍団を屈強にしたのである。尾張の小さな領国から日本の中央部を支配し、天下統一に王手をかけたのは、若々しい組織づくりにあったのだ。

さらに最先端の技術に注目している。鉄砲の有効性に着目した第一人者で、それは鉄砲にとどまらず、大砲や鉄製の軍艦まで作戦に応じて展開している。そこには当然ながら技術者を必要とするので、有能な技術者を集めている。キリスト教の宣教師を大切に扱って、ヨーロッパの文明や政治体制、軍事力なども貪欲に吸収し、世界の中の日本を認識して、日本が進むべき道を模索している。これも経営のトップには欠かせないことだろう。

また戦国時代は多くの領地を支配することであると考えられていたが、信長は領地の拡大と同時に、それを結びつける流通経済の支配を目ざしている。楽市楽座といった自由市場を開き、商品流通の拠点となる堺や大坂を支配したのも、その一環だ。

流通を支配すれば、敵の経済活動を封じて、自軍の行動が有利になるだけでなく、需要に応じて生産物を動かして、多大な利益を上げることができる。信長は米などの農産物に頼る経営から、商品経済からの収益を追究した初めての日本人だった。

常識に流されずに、果敢に新しいものに挑戦して、それを導入することは、組織を活性化させるだけではなく、飛躍させるエネルギーとなるものである。



## 信長語録

人間五十年、下天の内をくらぶれば、<sup>ゆめまぼろし</sup>夢幻の如くなり。一度生を得て<sup>せい めっ</sup>滅せぬ者のあるべきか。

〔現代語訳〕

人間五十年の生涯は、<sup>りくてん</sup>欲界の六天の最下位の下天の一日にしか相当しない<sup>はかな</sup>儚いものだ。それは夢幻を見ているようなものである。命を授かった者で、死なない者がいるだろうか。

『信長公記』巻首

是非に及ばず。

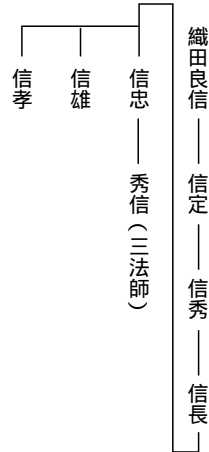
〔現代語訳〕

やむをえない。善い悪いを論じるまでもない。よし、わかった。

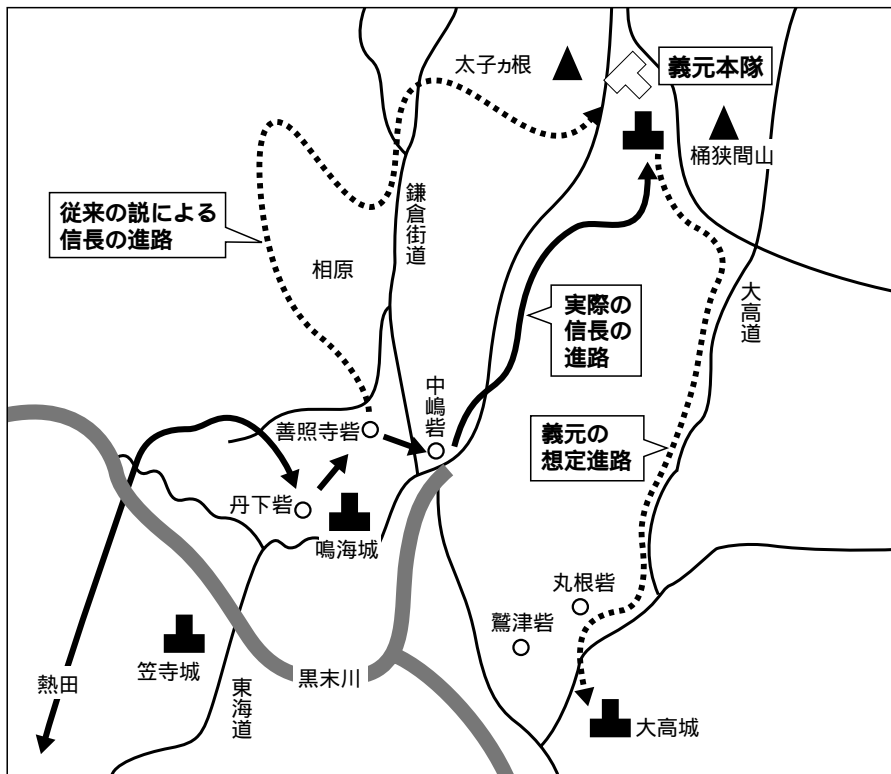
### 【織田信長略年表】

- |               |                                   |
|---------------|-----------------------------------|
| ・天文三年(一五三四)   | 織田信秀の子に生まれる。                      |
| ・天文十七年(一五四八)  | 家督を継ぐ。                            |
| ・天文二十二年(一五五三) | 美濃の斎藤道三と会見する。                     |
| ・永禄三年(一五六〇)   | 桶狭間の合戦で今川義元を倒す。                   |
| ・永禄十一年(一五六八)  | 足利義昭を将軍に擁す。                       |
| ・天正元年(一五七三)   | 室町幕府を滅亡させる。浅井・朝倉氏を滅ぼす。            |
| ・天正三年(一五七五)   | 長篠の合戦で武田勝頼を破る。越前を平定する。            |
| ・天正四年(一五七六)   | 安土城を築城する。                         |
| ・天正八年(一五八〇)   | 石山本願寺と和睦する。佐久間信盛を追放する。            |
| ・天正十年(一五八二)   | 武田氏を滅亡させる。本能寺で明智光秀に襲われて倒れる。享年四十九。 |

【織田氏略系図】



【桶狭間合戦要図】



作家・歴史家 武田鏡村  
(2009年2月作成)